音楽科授業に対する意欲減退とその回復の過程 —M-GTA を用いたインタビュー・データの分析— (要旨)

芸術系教育サブプログラム(音楽)

大戸 遥香

【指導教員】 森 薫 竹澤 栄祐 高濱 絵里子

【キーワード】 音楽科授業 意欲減退 意欲回復 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)

1. 課題設定と本研究の目的

2017(平成 29)年度に告示された小学校学習指導要領音楽科小目標(3)には、「音楽を愛好する心情」を育むことや、「音楽に親しむ態度」を養うことが示されている。しかし、ベネッセ総合教育研究所(2015)の調査では、11.4%の児童が音楽科を「まあ嫌い」「嫌い」と答えており、これは実技教科の中で最も高い。つまり、音楽科に対して意欲的ではない児童に、より注意深く目を向ける必要があるといえよう。音楽学習の意欲に関する研究は、前川(2023)らによって、学習意欲を高めるための教師の在り方等が論じられている。しかし、児童生徒が意欲的ではない状況、すなわち意欲の減退が生じる過程については研究の余地があると考えられる。

本研究の目的は、音楽科授業に対する意欲減退と回復までの過程を明らかにし、それを踏まえたうえで、教師が児童・生徒の意欲喪失を防ぐ方法と、意欲減退した場合の回復に向けた適切な関わり方について考察することである。

2. 研究の方法

研究の方法は、学習意欲減退に関する文献研究と、小中高の音楽科における意欲減退経験に関する質問紙調査と、インタビュー調査の3つである。本要旨では、インタビュー調査の結果を中心に述べることにする。

3. 音楽科の意欲減退経験に関するインタビュー調査

(1) 調査の概要

教師要因である音楽科授業の意欲減退経験についてインタビュー調査を行い、意欲減退から回復の過程を明らかにすることを目的とした。4名の調査対象者へ、当時の教師の関わりを中心に、意欲減退経験や回復した／回復しなかった理由等について半構造化インタビューにて尋ねた。また、本調査の分析方法はM-GTAを用いることとした。

(2) 結果

分析の結果、8個のカテゴリーと2個のサブカテゴリー、24個の概念が生成された(カテゴリー・サブカテゴリー・概念をそれぞれ【】、『』、□で表す)。そして、カテゴリー間の比較を行い結果図をまとめることができた。分析結果を文章化した意欲減退・回復のストーリーラインの概要を以下に示す。

まず、音楽科授業の中で学習者が「音楽的価値観の開示」をしたり、「躰き」を経験したりすることで意欲減退の【きっかけ】が起こる。次に、【きっかけ】に対する【教師の対応】は、『対応あり』と『対応なし』の2つがある。教師による

『対応あり』の場合は、児童生徒の「音楽的価値観の否定」や、児童生徒にとって「難しいアドバイス」、「理不尽な指摘」、「過度な指摘」がなされる。反対に、教師の『対応なし』の場合、教師は「向上の手立てが不明瞭」であったり、「見放す」、「褒めない」という行動をとったりする。

そして【教師の対応】は、【児童生徒が受ける不安】となる。具体的には、授業での不安感や緊張が「精神的負担」や「混乱」状態を引き起こしたり、友だちの存在を意識することで「自己との他者比較」や「羞恥」の感情が起きたりする。その際、【教師への恐怖イメージ】が生成され、【児童生徒が受ける不安】をより強固なものとしてしまう。

すると、児童生徒は音楽科授業に対して「自信喪失」し、授業の「活動拒否」や、教師や友達に教を乞うことに「遠慮」してしまい、音楽科授業への参加が【消極化】する。

意欲の回復を左右するのが【変化】である。具体的には、「新教師の登場」による環境の変化や、児童生徒自らが起こした「積極的行為による変化」、音楽学習観の「捉え方の変化」がある。これらの【変化】が、「新教師への満足感」の獲得、不安を感じていた「教師に対する肯定的な受け止め」、自らの学びの「納得感」に繋がり、意欲減退の【回復】に繋がる。しかし、【消極化】までの意欲減退の過程が「トラウマ」となってしまうと、意欲回復への見通しがたまたず「諦め」てしまったりすると【回復なし】の状態になる。

4. 本研究の成果

本研究で得られた重要な知見として、児童生徒の意欲減退経験と回復にもたらす音楽科教師の影響力の大きさがいえる。音楽科教師の専門性の高さゆえに、さらなる技能の向上に向けた指導が重視され、児童生徒の心理的ケアを怠った場合、それが音楽表現へのトラウマにまでも繋がりがかねないということに、教師はより自覚的にならなければならない。さらに、意欲が回復する過程でも教師の介入の少なさが課題である。これは先に述べた、児童生徒の意欲減退に対する、教師の認識の低さが影響していると考えられる。教師の認識改善は喫緊の課題であるといえよう。

主要参考・引用文献

服部純平・赤坂真二(2024)「クラス会議の手法を取り入れた教員による話し合いに関する研究—心理的安全性の視点をもとに—」、『日本学級経営学会誌』第6巻, 日本学級経営学会, pp.59-69.
木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』, 弘文堂。